

西洋服飾の史的事象によるジェンダー論
Gender Studies in the historic phenomenon of Western costume

伊藤 亜紀*1+, 水野 千依*2+, 新實 五穂*3+
Aki Ito*1+, Chiyori Mizuno*2+, and Iho Niimi*3+

*1 国際基督教大学教養学部 東京都三鷹市大沢 3-10-2

Faculty of Liberal Arts, International Christian University,
3-10-2 Osawa Mitaka-shi, Tokyo, Japan

*2 京都造形芸術大学芸術学部

Department of Art and Culture, Kyoto University of Art and Design

*3 お茶の水女子大学生活科学部

Faculty of Human Life and Environmental Sciences, Ochanomizu University

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : This joint research's primary objective is to consider the formation of awareness of Gender in the European costume during 14th-19th Century. We are investigating the various phenomena of the European clothing culture: for example, the theory of color symbolism during 15th-16th Century Italy, the representation of Italian Christian figures, and the cross-dressing in the Modern French literature.

We have taken notice of the color of the clothes of Christine de Pizan, (1365-1430ca.), the first professional authoress in Europe. In the miniatures illustrated by the Cité des Dames Master she always wore a blue *cotardie* and a double-horned headdress covered with a white veil. There is no doubt that she hoped to represent herself with this costume as Dufresne and Muzzarelli pointed out. In *Le Livre des Trois Vertus ou Le Trésor de la Cité des Dames* (1405), a didactic work for women, Christine recommends dress suitable for each level on the social hierarchy and warns against rich and lavish garments. Her simple *cotardie* without superfluous ornamentation represents exactly her view on dress. At the same time, in *Cent Ballades d'amant et de dame* (1407-1410) and in *Le Dit de la Rose* (1402) she suggests that *bleu* (o *azur*) signifies Loyalty. When she had the illuminator illustrate her own dress, she was sure to keep this popular medieval symbolism in mind. This proponent of women and excellent romantic poet desired to produce a modest image of herself acceptable to court society by a simple *cotardie*, a simple veil, and the color blue that signifies Loyalty.

In the study on the cross-dressing in the Renaissance Christian image culture, we examine a very strange phenomenon as Christ's gender-shift. In late Medieval and Renaissance culture, some (male) Christ

* 1) itoa@icu.ac.jp

images with a long female tunic inspired popular imagination to be transformed into female saints or unidentified androgynous figures. In particular, we focus on an analysis of images of St. Wilgefortis (feminized bearded crucifixes also known by a variety of other names including “Kümmernis” and “Uncumber”) derived from an early Medieval Italian statue “Volto Santo”, and various images of female saints and androgynous figures derived from “Christ of Sunday”. With emphasis on art as situated in the context of religion, spirituality, mythology, popular literature and gender relations, we try to interpret the memory of image from image-anthropological point of view.

And further, we consider why women cross-dress and the symbolic meaning of cross-dressing as carried out by women, specifically George Sand, a female writer of Romantic literature, and female supporters of the early socialism of Saint-Simonism. The Sand’s cross-dressing and the clothing worn by female Saint-Simonians are products of society or culture, and means for making a living as a woman, refusing the various social restrictions which women were forced in the 1830’s.

要旨：本研究は、14-19世紀の西洋服飾におけるジェンダー意識の形成について考察したものであり、主として15-16世紀のイタリアにおける色彩象徴論、イタリアのキリスト教聖像、19世紀フランスにおける異性装に関する調査をおこなった。

まずは、執筆によって生計をたてた初の女性であるクリスティーヌ・ド・ピザン（1365-1430年頃）の服飾観をとりあげた。『女の都』の画家の手がけた写本挿絵では、彼女はつねに青い服（コタルディ）を身につけ、角状のかぶりものの上に白いヴェールをつけている。デュフレヌやムツァレリがすでに指摘しているとおおり、この装いは彼女自身がそのように描かれることを望んだものであるのは疑いない。クリスティーヌは女性向け教訓書『三つの徳の書、あるいは女の都の宝典』（1405年）において、身分にあった服装を勧め、華美な装いを戒めている。彼女が身につけるのが余分な装飾のないコタルディであるというのも、そのような意識のあらわれであるといえよう。また彼女は、『恋人と奥方の百のバラード』（1407-1410年）や『薔薇の物語』（1402年）のなかで、青に「誠実」というシンボリズムがあることを詠っているが、己の姿を描かせるさいに、中世においてポピュラーなものであったこのシンボリズムが念頭にあったことは間違いない。女性の擁護者にして恋愛詩の達人であった彼女は、シンプルなコタルディ、同じくシンプルな白いヴェール、そして誠実さをあらわす青で、宮廷社会に受け入れられる謙虚な自分を演出しようとしたのである。

ルネサンスのキリスト教イメージ文化における異性装研究においては、キリストのジェンダー・シフトという特異な現象を検証した。中世後期からルネサンス期にかけて、女性用の長衣を身に付けた（男性の）キリスト像が民衆の想像力をかきたて、女性の聖人やアイデンティティ不詳の両性具有像へと変容されるという事例がみられた。なかでも注目したのは、初期中世のイタリアの木製磔刑像《ヴォルト・サント》から派生した《ウィルゲフォルティス》（「キムメルニス」や「オントコマー」など他のさまざまな名称でも知られる女性の有髭磔刑像）と、《主日のキリスト》から派生したさまざまな聖女像や両性具有像である。芸術を、宗教、思想、神学、文学、ジェンダーというコンテクストのなかで考察することで、イメージ人類学的視座から、イメージの記憶をめぐる問題を解釈するべく試みた。

さらに、フランスにおけるフェミニズムの黎明期を生きたとされる女性たち、すなわち、ロマン主義文学を代表する女流作家であるジョルジュ・サンドと、初期社会主義思想であるサン＝シモン主義を支持した女性たちとを事例にして、19世紀フランスにおける女性の異性装を取り巻く個人的な意識は勿論、社会的な意識や背景を考察した。そしてサンドが行った男装も、女性サン＝シモン主義者たちがズボン状のペチコートを着用する行為も、個人的な性向に基づく行為である以上に、社会や文化の産物であり、女性たちが当時の社会によって強いられる制約を拒絶しながら、生きていくための手段であったことを明らかにした。

配当決定額

平成 20 年度	560,000 円
平成 21 年度	1,400,000 円
平成 22 年度	1,150,000 円
合計	3,110,000 円

研究経過

本研究は、イタリアおよびフランスにおける服飾の史的事象を通して、多様なジェンダー意識が、中世から近代にいたる歴史の中でいかに成立してきたかを考察したものである。手稿・書簡・回想録・小説・戯曲、韻文作品などの文献資料と、壁画や板絵、写本挿絵、彫像、服飾・風俗版画、諷刺画などの図像資料を用いて、実証的調査をおこない、より充実した研究成果を得るため、現地（イタリアおよびスイスの諸聖堂、フィレンツェ国立図書館、マルチャーナ国立図書館、シエナ国立絵画館、アルスナル図書館、カルナヴァレ博物館など）での資料収集・調査・分析、国内の大学図書館（小樽商科大学附属図書館など）での書誌学的な調査などを実施した。

研究結果

中世末からルネサンス期のイタリア、および近代フランスの服飾にまつわる、さまざまな社会的・文化的事象を通して、ジェンダー観や女らしさ・男らしさという精神性を解明したことに加え、キリスト教や世俗の世界における性の接近・同化・越境という現象に焦点を当て、その行為に付随する心性・感性を究明した。

(1) 15-16 世紀イタリアおよびフランスの女性服飾にみる色彩シンボリズム

従来より、紋章学や服飾史、ヨーロッパ文化史の分野で注目を集めてきたシシルの『色彩の紋章』(*Le Blason des Couleurs*) (初版 1495 年) は、2 部構成をとり、第 I 部では、金 (or)、銀 (argent)、朱 (vermeil)、青 (azur)、黒 (noir)、緑 (verd)、赤紫 (pourpre) という、紋章を構成する 7 つの基本色のシンボリズムが論じられている。一方、1505 年の第 2 版から追加された第 II 部では、先の基本色に加え、黄褐色 (fauve) やねずみ色 (gris) といった中間色もとりあげられ、それらの色を組み合わせた場合の意味や各々の色の着こなし方、男女の服飾品の色などが詳細に説明されている。『色彩の紋章』全訳の過程で、第 I 部では 15 世紀以前の伝統的な色彩観、第 II 部では 16 世紀前半のフランスにおける新しい色彩観が語られていること、そして 1565 年に伊語版が出

されたことにより、イタリアのジョヴァンニ・パオロ・ロマッツォやラッファエッロ・ボルギーニらによる美術理論や色彩理論にも影響を与えたことが明らかとなった [1]。

また15世紀初頭のフランス宮廷で活躍した女流作家クリスティーヌ・ド・ピザンの事跡を論じた Maria Giuseppina Muzzarelli, *Un'italiana alla corte di Francia. Christine de Pizan, intellettuale e donna*, Mulino, Bologna, 2007 の邦訳を刊行した [2]。クリスティーヌの伝記は欧米ではすでに数多く出版されているが、著者ムツアレリ氏は彼女がイタリア人であること、それもボローニャ大学で教鞭をとった学者の娘であることを繰り返し述べている。つまり幼少期にフランスに移住したものの、クリスティーヌの豊富な知識の源泉は、ダンテやボッカッチョを生んだイタリアにあることを強調するのである。中世末期のイタリアとフランスのあいだの知的交流という問題を考える上でも、本書の寄与するところは大きい。

加えてムツアレリ氏は、クリスティーヌの自筆稿本にみられる彼女の肖像の多くが、当時のフランスで身分の上下を問わず非常に好まれた青い服（コタルディ）を着ていることを指摘している。このことをさらに検証すると、つねに青衣のクリスティーヌを描いているのは、1404年以降に彼女の写本工房に雇われた『女の都』の画家であることが理解できる。この色にはクリスティーヌが服装に求めた「慎み深さ」のみならず、写本の献呈者に対する著者の「誠実さ」がこめられている可能性が高いことが、女性向け教訓書『三つの徳の書、あるいは女の都の宝典』や問答歌『恋人と奥方の百のバラード』、寓意詩『薔薇の物語』などから読みとれる [3]。

(2) 15-16世紀イタリアおよび周辺のキリスト教聖像にみる異性装

中世末からルネサンス期における異性装を示すキリスト教聖像の生成・変容・受容について、歴史人類学的視座から考察した。

主に対象としたのは、ルッカの《ヴォルト・サント》（キリストを直接知るニコデムスの手になると考えられた半アケイロポイトス的性格を有する木製磔刑像）から派生する有髭聖女キムメルニス（別称ウィルゲフォルティス、リベラータ、オントコマー）像と、北イタリア、スイス、ドイツ、イギリスなどに普及した「主日のキリスト」という図像から派生した聖女像、さらにはその両性具有像など、従来、ほとんど研究されてこなかった稀有な図像群である。「ヴォルト・サント」と「主日のキリスト」は一見別個の図像と考えられかねないが、後者の着想源のひとつに、長いチュニカを身にまとった「ヴォルト・サント」の存在が想定されており、異性装ともいいうるその衣服がまさに人々の想像力を駆り立て、女性像や両性具有像への転換を引き起こした可能性が想定される。服飾史的観点からも掘り下げる意義のある像である。本研究では、各事例に関連する図像データ、伝承や逸話を収集するとともに、像のジェンダーの反転がいかなる意味作用を担っているのかを、個々の歴史的・文化的文脈に照らしつつ考察を進めた。

とくに問題としたのは、この種の図像の生成と、「性の越境／両性具有化」という現象である。キリスト教文化においては、新しい図像はしばしば既存の（ときに異教の）図像をベースに、その本来の力を増幅させる形で形成されることが多いが、昨年度、オーストリア、スロベニア、北イタリア、スイス、ボヘミア、イギリスに頻りに描かれた「主日のキリスト」という図像を中心に現地調査を行った結果、上記の図像の成立と伝統的な図像との関わりはより複雑な様相を示していることが明らかとなった。なかでも着目したのは、新たに生成した像のアイデンティティの

曖昧さである。「ヴォルト・サント」の女性版が様々な呼称を持つことは先にも触れたが、これは「主日のキリスト」にも指摘することができる。「主日のキリスト」は、それ自体「悲しみの人」や「キリストの受難具(アルマ・クリスティ)」という伝統的図像をいわばパロディ化したもので、受難具の代わりに主日に禁じられた労働の道具に取り囲まれ、ときにそれで傷つけられているキリストを描いた異色の図像である。その女性化した像は、地方色の濃い土着の聖女像の名前で呼ばれることが多く、アイデンティティは一定ではない。さらにそれを両性具有化した像の場合は、キリストとも聖女ともほとんど同定しがたい解説不可能なイメージと化している。像が描かれた場や他の図像との関連において調査した結果、先にも触れたように、本図像の着想源のひとつであるルッカの《ヴォルト・サント》の女性版「キムメルニス」像と同壁面に並置される事例が複数存在し、これら一連の図像体系のなかで本像のジェンダー・シフトの論理を考察する手がかりを得ることができた。しかしながら、意味論的には、聖堂内でももっとも神聖な内陣に両性具有化した像が描かれる例があるため、これらをたんに田園地方の文化に固有の図像知識の欠如や異端性として片付けることができず、その解説は困難を極めた。この種の解説不可能な図像を解釈するにあたっては、現地での図像調査、同時代の文字・図像資料の分析に加え、他の事例に関するイメージ人類学的研究の所産も参照することとなった。とくに、近年、19世紀初頭のアリゾナやニュー・メキシコにおいて生み出された両義的なキマイラの偶像(キリスト教的図像と先住民のシャーマニズム的図像の混淆から生まれ男女両性を往還する特異な像)に着目し、先住民と入植者との間の文化的葛藤というコンテクストのなかでイメージの図像記憶がいかに機能したかという観点から掘り下げたカルロ・セヴェーリの研究事例などとも比較考証した。両性具有化した「主日のキリスト」については明確な結論ははまだ見いだせておらず、宗教改革と対抗宗教改革との対立のなかでこの種の逸脱した図像が置かれていた状況を推測するにとどまっているが、今後、地方独自の歴史的状況や史料をさらに調査する予定である。本研究の成果は、昨年度提出した博士(論文博士)学位論文[4]、およびそれを加筆修正し今年度刊行を予定している著書[5]の一部において公表している。

さらに、もう一つの研究主題であるキリスト教礼拝像の「着脱」という問題については、ルネサンス期にフィレンツェで格別の崇敬を集めたインブルネータの聖母像に焦点を当て、奇蹟力の制御や聖遺物容器との類比という文脈で人類学的視点から考察を重ね、その成果の一部を奉納像にまつわる論文[6]、および先述の著書[5]において発表した。

(3) 19世紀フランスにおける女性の異性装

異性装研究に関する書誌学的な調査をおこなった結果、女性が異性装を行う理由は、物理的および経済的な文脈の中で、あるいは戦争や革命などの特殊な状況下でのみ語られる傾向があるため、より精神的な側面に重きを置き、日常生活の枠組みの中で、女性の異性装を捉え直す必要性があることを理解した。また異性装が王令や警察令などでたびたび禁じられていたこともあり、警察・裁判記録を資料とする研究が多く、その場合、異性装を行った動機や理由は社会的に受け入れられ、共感を呼び、自身を正当化できるものになりやすいという問題点が存在することも理解した。したがって、異性装という行為についての意識分析に文学作品の分析が実に有効であることに加え、当時の人々の感性を探るためには、文学作品の分析が欠かすことができないもので

あることを再認識した。

ゆえに、“男装の麗人”として知られるロマン主義の女性作家ジョルジュ・サンドによって著された『ガブリエル』・『アンディヤナ』・『モープラ』・『レリヤ』など、1830年代の彼女の作品における服飾描写の分析を進展させるとともに、どのような作中人物が異性装を行うのか、女性の異性装の描写がいかなる文脈の中で現れ、どのような役割や効果を担っているのかを具体的に検討した。とりわけ『ガブリエル』、およびそれを舞台化した『ジュリア』に関しては、物語が構想された背景に加え、異性装を行う女主人公像を探求し、そのイメージを明確にした。さらにサンドの作品と併せて、ゴーチェの『モーパン嬢』やバルザック『ベアトリックス』など、同時代の男性作家による作品も検討し、各作家にとって異性装が何を表象していたのかを明らかにした。その上で、サンドの著作における女主人公の異性装と実生活での彼女の男装とを比較考察し、創作活動と私生活の両面から、サンドの性別二元論に対する考えを探り、彼女にとっての「第三の性」とでも言うべき「女性以上の存在」という表象が、「男性と同等の教育を受けた女性像」であることを明らかにした [7]。

また、19世紀前半のフランス社会に普及した女性解放の思想や女性運動が、服装改革と連動していた点に注目し、初期社会主義思想の賛同者、とりわけサン＝シモン主義者によって推進された服装改革（制服制度）の全容を解明して、それを支える精神性や社会的・文化的背景を明確にした。その際、女性サン＝シモン主義者が着用したとされるズボン型の下着を取り上げ、「ズボンをめぐる争い」をテーマにした中世から近代までの大衆的な通俗版画と照らし合わせて分析をおこない、ズボンおよびズボン型の下着が持つシンボリックな意味や、夫婦間の男女平等を目指すサン＝シモン主義の女性解放思想とズボンに付随する表象世界との結びつきを理解した。

これらの研究成果をまとめ、2009年7月に大阪府立大学女性学研究センター主催の講演会およびセミナーで公表し [8]、2010年10月に著書として刊行した [9]。

(4) マリア・ジュゼッピーナ・ムツアレツリ招聘講演会

2年半におよぶ本プロジェクトの総括として、2010年11月に、ボローニャ大学文学部教授マリア・ジュゼッピーナ・ムツアレツリ氏を招聘した。11月1日には東京のイタリア文化会館アニェッリホール、11月2日にはキャンパスプラザ京都（関西イタリア史研究会共催）にて、「クリスティーヌ・ド・ピザン（1365-1431年頃）——イタリアからフランス、そして日本へ」と題し、クリスティーヌの生涯と作品を論じた同氏の著書 [2] に関する講演会を実施した。クリスティーヌに関しては、その旺盛な作家活動や女性の擁護者としての活躍のみならず、近年では彼女の写本工場の経営者としての側面、また挿絵画家の雇用状況、挿絵に描かれた服装などにも注目が集まっている。本講演会では、2009年にイタリアで公開されたクリスティーヌの伝記映画「クリスティーヌ／クリスティーナ」、および映画で着用された衣裳の展覧会（2009年末にボローニャ市立中世博物館で開催）の様も一部紹介され、デザイナーのナナ・チェッキが同時代の図像資料を十分に調査し、そこに彼女自身のイマジネーションを加えて制作にあたったことが理解できた。

11月5日には、東京大学駒場キャンパス18号館において、「クリスティーヌ・ド・ピザン——最初の女性知識人」と題した講演会がおこなわれた（東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育センター」（UTCP）共催）。本講演では、クリスティーヌと学者であった父親との

関わりや宮廷の王侯貴顕との人間関係、18世紀末以降のクリスティーヌの再評価、とりわけ「フェミニスト」としての評価に焦点が当てられた。

全3回の講演会を通して100名以上の聴講者を得て、各回、活発な質疑応答がおこなわれた。わが国においては依然クリスティーヌ・ド・ピザンの知名度は低いですが、写本挿絵を用いて、自らのイメージを読者に浸透させるという画期的な試みをおこなった女流作家を紹介したことには、少なからず意義があると思われる。



11/1 講演会の模様(左がムツアレッリ氏、右は通訳の山崎彩氏)



11/2 講演会の模様(左は通訳の田口かおり氏)



11/5 講演会の模様(右は司会・通訳の村松真理子氏(東京大学准教授))

(5)その他の活動

2008年12月17日から25日まで、銀座の和光(並木ホール)で開催された「レースの中の動物達——アンティークレースの世界」を監修した。本展覧会は、16-20世紀につくられた動物モチーフのあるレース作品を展示し、イタリアやベルギーのレース女工のきわめて水準の高い技術を紹介したもので、1週間という短い会期にも関わらず、多数の観客を集めた。

また2009年2月28日に、スイスのフリブール大学より美術史家ヴィクトル・I・ストイキツァ教授を招聘し、日本橋公会堂にて講演会「集中そして／あるいは蒸発——肖像・自画像・〈近代生活〉(Centralisation et / ou Vaporisation. Portraits, autoportraits et “la vie moderne”)」を開催した(京都造

形芸術大学通信教育部芸術学科・京都造形芸術大学比較藝術学研究センター共催)。100名を超える来場者を迎え、活発な議論が交わされた。

参考文献

1. シシル：「色彩の紋章」，伊藤亜紀，徳井淑子(訳)，悠書館 (2009)
2. マリア・ジュゼッピーナ・ムツァレツリ：「フランス宮廷のイタリア女性—「文化人」クリスティーヌ・ド・ピザン」，伊藤亜紀 (訳)，知泉書館 (2010)
3. 伊藤亜紀：「青を着る「わたし」—「作家」クリスティーヌ・ド・ピザンの服飾による自己表現」：西洋中世研究, Vol. 2, pp.50-61 (2010)
4. 水野千依：「ルネサンスの図像における奇跡・分身・予言—イメージ人類学的視座から—」(京都大学大学院、博士論文) (2010)
5. 水野千依：「聖像と芸術のあいだ—ルネサンスの図像における奇跡・分身・予言 (仮題)」，名古屋大学出版会 (2011 刊行予定)
6. 水野千依：「ルネサンスの奉納像—〈痕跡〉と〈分配されたパーソン〉」：美術フォーラム 21, 2009, pp.101-108, 醍醐書房, Vol. 20 (2009)
7. 新實五穂：「19 世紀フランスの服飾と女性性—ジョルジュ・サンドの実生活における男装と対話式小説『ガブリエル』における女主人公の異性装—」：杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要, Vol.8, pp.93-104 (2010)
8. 新實五穂：「異性装研究—近代フランスにおける服飾の社会表象—」：第 14 期女性学連続講演会「ジェンダーを装う」, pp.71-100, 大阪府立大学女性学研究センター (2010)
9. 新實五穂：「社会表象としての服飾—近代フランスにおける異性装の研究—」，東信堂 (2010)